

आयूस: あーゆす

〈発行〉京都市教短期大学図書館／京都市宇治市槇島町千足80

○ ● ● ● 早春に思うこと ● ● ● ○

副館長・助教授 伊藤和男

早春—この言葉が私は好きである。長く厳しい冬を乗り越えてやがて来たるべき花々の春を予感させ、その先駆けとなるこの言葉が。とりわけクロッカス、スイセンなど、イギリスの早春を彩る花々が私の心を常に引きつける。イギリスの庭園、公園には、特にスイセンが群をなして植えられていて、それらが早春の光と風を受け美しく揺れ動き、見る人々の心を暖めてくれるのである。ロンドンのハイド・パーク、ケンジントン・ガーデンズなどの有名な公園に美しく咲き乱れるスイセンの姿をはじめて私が見た時、なるほどあのイギリスの詩人ワーズワース(1770-1850)が歌ったスイセンの描写の意味するところはこのようなものだと感得することが出来た。

自然を愛し、そこに人生を生きるための精神的支柱を感じ取ることの出来たワーズワースの言葉が思い起こされる。「自然をして汝の師たらしめよ。」(“Let Nature be your teacher.”) 神の創造した自然こそ、それを真剣に観察し味わう能力のある人間にとって最高の知恵の宝庫であり、人生の師であると言う。常に自然の中で、謙虚であること、人間の判断や知識、知恵の未熟なことを忘れず、自然からの恵みを尊重し慎ましく生きて行くことの大切さをワーズワースの作品が語っていると見えよう。

今日、我々を取り巻く世界状況は、人類がかつて経験したことがないほど極度に緊迫したものになっている。我々は生きるべき道を忘れ、ただ運

命の操り人形のようにさまよっているのではない。こんな不安な時代に、私が思い出す、同じイギリスの詩人、ジョン・キーツ(1795-1821)の言葉が深く胸を打つ。それは「消極的受容能力」(“Negative Capability”)という言葉である。「つまり人間が真理や理由に苛立って到達しようとせず、かえって不確かさや、謎や、疑惑の中に安んじていられるときの力なのです。」とキーツは彼の弟にあてた手紙の中で説明をしている。不安な時代、危険な時代、何が真理なのかかわからない時代の中で、自分自身を見失うのではなく、その不安の真ただ中にじっくりと腰を据え、やがて訪れるであろう真理の到来、救いの到来を待つという考え方であろう。

人間は歴史始まって以来、常に悩み、苦しみの中で苛立って生きて来たのが実相とも言えよう。新約聖書マタイ伝にあるキリストの「山上の垂訓」の中の、「野のユリを思え、労さず紡がざるなり。」という感動的な言葉が私の脳裏を駆け巡っている。明日のことを煩い、労すること、そして争うことの絶えない人類の歴史を思う時、早春の花々の自然な生き生きとした姿を眺め、その輝かしくも慎ましく、愛らしい光景に心慰む思いがする。21世紀が、様々な苦難を乗り越えて、寒い冬の彼方に、早春の花々のような、さわやかで安らぎに満ちた希望を確実に抱くことの出来る時代であってほしいと、今心より切望する。



「少而学則壯而有為」



教授 金井 秀子 (小児精神神経学)

平成8年3月に京都教育大学を定年退官し、同年4月より本学へ着任して、はや7年が過ぎようとしています。

私は小児科医として歩み始めた時、当時医師達が障害児医学や児童精神医学に関心を持たなかった領域に独力で踏み込んだのです。治らない病、診療に時間がかかり、治療効果が少ないといわれ、臨床医が避けていた分野に私は強く惹き付けられ今日に至っています。

その原動力となっているのは、京都府立医大の3回生(現在の5回生)の冬、小児科の外来実習で最初に会った患者さんがダウン症児であったことです。母親は数カ所の病院での受診後、最後の頼みの綱を求めて幼児を連れて大学病院へきたのです。

教授は子どもを診察して、私の記した予診と臨床所見に目を通し、母親に「蒙古症ですね。ここで治療することは何もありません」と言われ、次の患者の入室を婦長に促したのです。私は母親の気持ちを察し、廊下へ一緒に出ました。その時、母親が「この子をどうしたらいいのでしょうか?」と目に涙をためて私の手を握りしめたのです。

この出会いが私の人生を決めたと思います。

大学での指導者も、文献や専門書もなかった時代でした。患児や母親から学ぶことによって、私は医師として観察と洞察力を養って臨床や基礎研究を積み重ねていったのです。

「小児精神神経研究会」の発足と同時に入会し、昭和37年、京都府中央児童相談所の嘱託医となり、子どもに関心をもつ精神科医と心理学者との出会いは私にとって良き共同研究者ができたのでありました。

また、京都女子大学・大学院で児童医学の講義と研究、更に、女子大の発達クリニック設立によって、そこでの健常乳幼児の保育室運営と障害児(ダウン症児、自閉症児他)の外来診療は小児精神科医としての研究に大きな力となりました。

大学院を修了して10年経ち、30代後半になり、臨床および研究が認められ、母校の京都府立医科大学精神神経学教室で、大学で初めて開設された小児精神科専門外来と児童精神医学の講義を担当することとなり、40年余り1000例を越える患児と親御さん達との出会いは私にとって医者としての得難い貴重な宝石であります。

それに加え、20年余りの大津家庭裁判所での少年事件、家事事件の精神鑑定医としての経験も、京都教育大学・大学院での学校精神保健や障害児教育の研究に多大の糧となったことは言うまでもありません。

これらの多くの経験から「人づくりは乳幼児期の保育・教育が基本である」と痛切に感じ、訴えてきました。そして私は自分のライフワークの集大成として本学の幼児教育学科に赴任したのです。

現在も京都市の基本構想での「教育・人づくり部会」や「21世紀人づくり委員会」に関与しています。

人を対象とする仕事は子ども達や、親達から学ぶ生涯学習であります。

私の人生の指針の一つとして、江戸時代後期の儒学者佐藤一斎の『言志晩録』の中に次の言葉があります。

少而学則壯而有為(若くして学べば、すなわち壯にして為すこと有り)

壯而学則老而不衰(壯にして学べば、すなわち老いて衰えず)

老而学則死而不朽(老いて学べば、すなわち死して朽ちず)

人間は死ぬまで学ばねばならないのです。

私は患児達、学生達の為にと考えてしてきたことは実は「私自身の学習のため」であり、多くの人との出会いによって学ばせていただいたことを心から感謝しています。

私のすすめる3冊

助教授 森井秀樹 (運動生理学)

1 『スーパー元気術 運動不足に克つ!』 石河利寛; ベースボール・マガジン社

生涯を通して健康で、自分の始末は自分でできる体力を持ち続けることは、誰もが望むことであろう。しかし現代社会は身体にとって悪い事柄(飽食、運動不足、喫煙、心理的ストレスなど)が多く氾濫している。本書は、中高年が運動嫌いを克服し生活習慣病と称す心疾患、高血圧、糖尿病や腰痛について、その原因と撃退法をイラストによりわかりやすく解説している。最近、お腹のたるみや運動不足を感じている人(特に、教職員)にはお薦めできる一冊であろう。

2 『スポーツ選手の摂食障害』 NATA [編]・辻 秀一 [監訳]; 大修館書店

摂食障害(神経性拒食症と神経性過食症)は、女性に対し特有の心理学的障害とされている。本書は、全米アスレティックトレーナーズ協会が編集し、アスリート(競技者)特有の摂食障害の事例分析から、その予防法、発見法、対処法を具体的にわかりやすく解説している。また摂食障害は、一般女性においても現代病となりつつあることから本書の前半では、摂食障害の特徴や問題点、食行動や正しいウエイトコントロールの考え方をわかりやすく説明している。栄養学、心理学、健康学を学ぶ学生に是非とも一読して頂きたい。

3 『薬いらずの肉体改造法』 宝田雄大; ベースボール・マガジン社

筋肉は、ヒト(人間)が生きていく上で重要な組織である。如何にこの筋肉を鍛え大きく、強くするかがアスリートにおいては競技成績に、また一般人にとってはダイエットや老化防止につながる。本書の前半は、筋肉のしくみと鍛え方を運動生理学やトレーニング科学の知識なしに理解できるようイラストを用いて解説し、後半では著者が特許を取得している「低酸素性筋力トレーニング」の方法と実践、応用について説明している。筋力トレーニングに興味のある人には、最近のトピックスとして読む価値がある。

万照応

自然は一つの神殿 そこでは生ある柱が
時おり おぼろな言葉を洩らす
人は象徴の森をよぎってそこを過ぎゆき
森は親しげなまなざしで人を見送る

夜のように 光明のように 広漠たる
暗くて深い統一の中に 遠くから
まざり合う長い反響にも似て
薫りと色と音響は互いに答え合う

薫りには 少年の肌のように新鮮なもの
木笛のようにしつとりしたもの 牧場のように緑
のものがあ

— そのほか 腐った 豊かな 勝ち誇った薫り
もあって

竜涎 麝香 安息香 焼香のように
限らない事物の形に拮がってゆき
精神と感覚との熱狂を歌い上げる

『ボードレール詩集』 ボードレール 村上菊一郎 訳 (角川書店)

※ この詩は、ボードレール(一八二一—一八七)が生前に出版したただ一つの詩集『悪の華』に収められています。



『ロマネスク』を読んで



初等教育専攻2回生 赤木仁美

太宰治の『ロマネスク』という作品は三つの話からなっている。一つ目の話は「仙術太郎」である。これは、太郎という人の人生を描いたものである。題にあるように太郎は23歳の時に仙術の本と出会い、どっぷりと仙術にはまってしまう。太郎は仙術でねずみやわしやへびになることができるようになる。私は太郎がどうして人間以外のものになることを楽しんでいるのかが疑問であった。その答えは話の中には書いていなかった。正解ではないのかもしれないが、私は、太郎が人間であることが面倒くさいと感じているのではないかと考えた。太郎は生まれた時から変わっていて、普通の人がするようなことも自分からしようとしたことがなかったと書いてあったからである。人間であることが面倒であるというのはわかる気がする。人間はやらなければならぬことがたくさんあるし、複雑な感情もいろいろ持ってしまう。これが太郎にはたまらなく面倒であったのかもしれない。しかし実際のところ、人間のそういういろいろな部分が嫌であるからといって、私達が仙術で他の動物になれたりするものではない。この話には、どこかに人間の逃げ場がないかという太宰治自身の思いが反映されているのではないかと私は感じた。

二つ目の話は「喧嘩次郎兵衛」である。この話の主人公である次郎兵衛はある日、喧嘩の強い男になりたいと思い修業をはじめ。そして、誰にも負けない喧嘩の強い男になる。しかし、その力を妻に認めてもらうためにしたことは、妻への一方的な暴力となってしまったのである。結果的に次郎兵衛は自分で鍛えあげた手で妻を殺してしまう。この話から私は、自分の力を他人に認めてもらうということはどういうことであるかと考えさせられた。自分の持っている力を認めてもらおうと必死になっている時には気付かないのかもしれないが、そうやって自分の力を押し通しているうちに、知らず知らずのうちに誰か他の人を傷つけているのではないか、誰かを傷つけてまで自分の

力を認めてもらう必要があるのか、考えるほどにわけがわからなくなる。次郎兵衛は妻を殺すつもりはなかった。ただ自分の力を認めてほしかっただけなのである。私達の日常生活の中にも、人を傷つけるつもりではなかったのに自分の主張が強すぎて、気付かないうちに傷つけてしまっていることがきっとたくさんあるはずである。それがわかったからといって、人を傷つけることをなくすることはきっとできない。人間はやはり自分の力は認めてもらいたいと思うし、自分の主張は押し通すものだからである。この話は、私にこういったことを伝えてくれるものであったのだと感じた。

最後の三つ目の話は「嘘の三郎」である。題の通り三郎は嘘をつくことが得意であった、というより嘘しかつかなかった。三郎の考え方は「人間万事嘘は誠」というものであった。嘘は嘘であり誠ではあり得ないと考えていた私は、この三郎の考え方が理解できなかった。しかし、嘘というものが誠になり得るとしたらそれはどういう時なのだろうと考えたら、それは誰かが嘘を信じてくれた時、その信じてくれた人と嘘をついた人との間でならば、嘘も誠になるのかもしれないと思えるようになった。人間とは本当にややこしい生き物である。本当のことだけを話せばいいのに、都合の悪いことを嘘で覆ってしまったり、嘘の力をかりて幸せになったり、いろんなことができてしまう。三郎はこんな「嘘」のいい部分だけをうまく利用して生きていたのかもしれない。

この『ロマネスク』の話の中で私は、著者太宰治が人間というものをいかに悟っているかを感じた。それはきっとこの作品を太宰治が自殺の前提に遺書として書いたから、つまり、いざ死ぬというときになって、人間のすべてが見えたからなのかもしれない。太宰が悟った人間がよくわかる作品だったと思う。

太宰 治作：『富嶽百景・走れメロス：
他8篇』（岩波文庫）